

Bird Research Annual Report 2014

バードリサーチ活動報告



NPO法人 バードリサーチ
Japan Bird Research Association

森, 草原, 身近な場所の 鳥のモニタリング

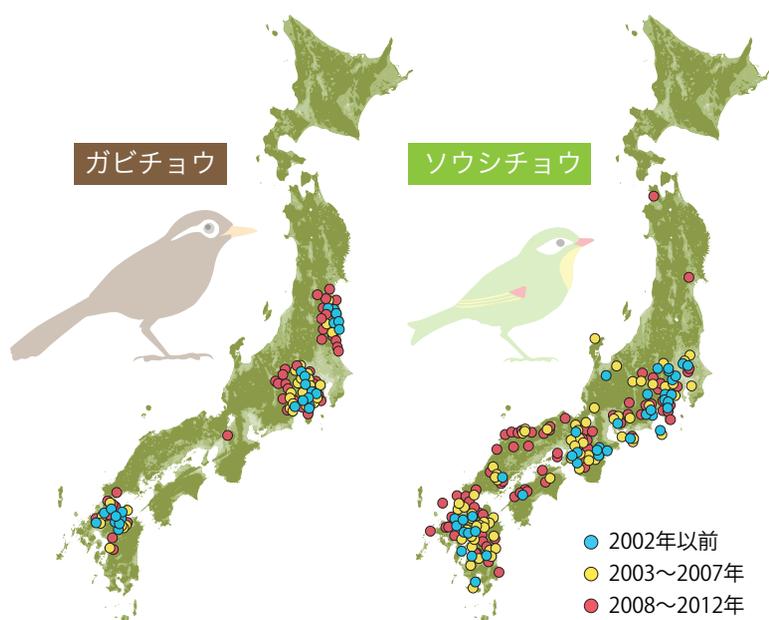
家のまわりの身近な鳥の変化を見守る「ペランダバードウォッチ」、年による変化の大きい冬鳥の飛来状況を見守る「冬鳥ウォッチ」、ガビチョウやソウシチョウといった外来種や分布の変化が顕著な種をターゲットにした調査などを実施しています。また、日本の自然環境の変化をモニタリングする環境省の「モニタリングサイト1000」の調査に協力しています。



ソウシチョウ (Photo: 谷岡仁)



徐々に分布を拡げるガビチョウと急速に拡げるソウシチョウ



外来鳥のガビチョウとソウシチョウは1980年代から野外に定着し、各地で分布を拡大しています。モニタリングサイト1000や外来鳥ウォッチなどの結果をあわせて、分布の変化を見てみると、ガビチョウは南東北、関東西部、九州北部から徐々に分布を拡げていることがわかりました。それに対してソウシチョウは、飛び火状に分布を拡げていました。留鳥のガビチョウと漂鳥のソウシチョウ。この移動能力の差が分布拡大の違いにつながっているのかもしれません。

← ガビチョウとソウシチョウの分布拡大の様子

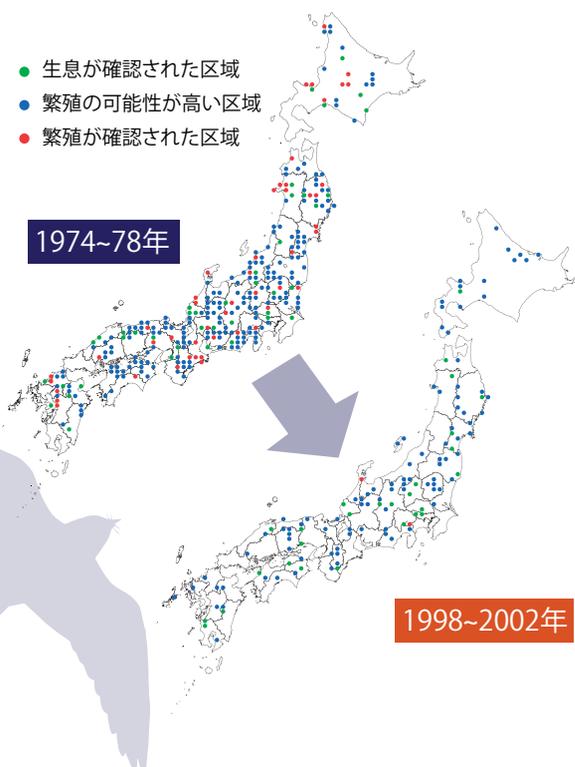


全国鳥類繁殖分布調査がはじまります

1970年代と1990年代に環境省の全国鳥類繁殖分布調査が行なわれました。多くの鳥の分布の変化が明らかになり、レッドリストの改訂など様々な保護施策に利用されています。前回の調査から20年が経とうとしています。近年、スズメの減少、外来種の分布拡大、藪の鳥の減少などが起きており、日本の鳥の今を明らかにする必要性が高まっています。しかし緊縮財政の世の中、調査を実施する目処がたっていません。そこでNGOと環境省の共同調査としてこの調査を実施しようと準備しています。全国規模の大調査です。皆さんの協力なしに成功させることはできません。みんなで日本の鳥の今を明らかにしましょう。

BRNews 11(10)

過去の環境省の分布調査でわかったヨタカの減少 →



水鳥のモニタリング

国内に渡来するガンカモ類を湖や沼・河川などの環境指標として、シギ・チドリ類を湿地の環境指標として、モニタリングを行なっています。また、特定の種に注目した調査、環境に注目した調査、渡り鳥の初認や外来種の動向についての情報収集、カウントイベントなどを実施し、水鳥やその生息環境の調査を進めています。



シロチドリ (Photo: 三曾田明)



かつての普通種シロチドリ

シロチドリの個体数は、1970年代から極端に減少しており、現在も回復傾向にはありません。繁殖場所となる砂浜の減少、人との摩擦や天敵による捕食などが繁殖失敗の要因としてあげられています。そのような状況を受けて、シロチドリは環境省のレッドリストにおいて絶滅危惧Ⅱ類に指定されました。バードリサーチでは、減少の要因や繁殖状況の詳しい把握のため、分布や生息密度・環境について調査を行なっています。



シロチドリの営巣環境

BRNews 11(3)
水鳥通信 2014 Apr.

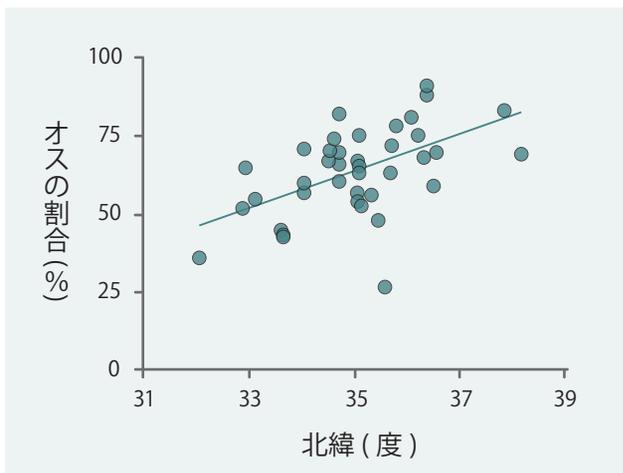


カモ類性比調査

カモ類のオスとメスの比率はどのようになっているのでしょうか。2014年1月に行なった参加型調査では、国内206地点と海外7地点からの記録が集まりました。分析結果からは、多くの種では50～60%がオスで、一番オス比率が高いのはホシハジロでした。さらに

ホシハジロでは北の越冬地ほどオスが多くなる傾向が見られました。理由は解明されていませんが、北の方が早く繁殖地に渡れる、オスがメスを追い出してよい場所にいるなどの仮説があります。

BRNews 11(2), 水鳥通信 2014 Apr.



↑ 緯度によるホシハジロのオスの比率の変化



ホシハジロ
オス (Photo: 大塚之稔)

メス (Photo: 藤波不二雄)

生物季節のモニタリング



オオルリ (Photo: 又野淳子)

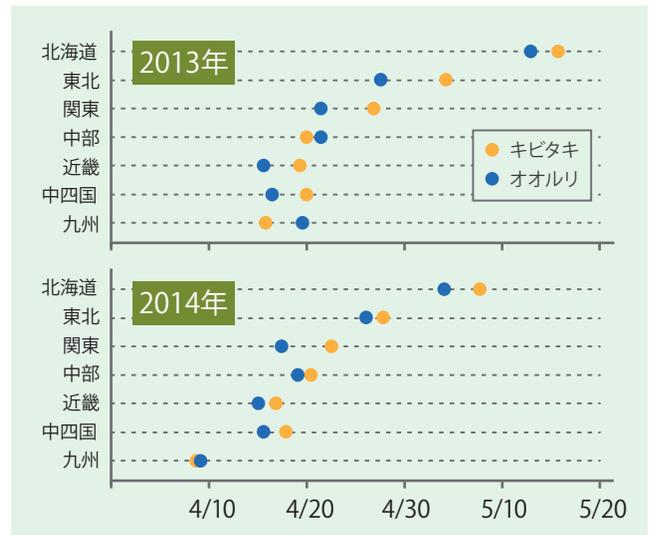
気候変動により、桜の開花時期が早くなったりするなど、生物季節の乱れが心配されています。そこで全国の皆さんの協力を得て、ウグイスやヒバリの初鳴き、夏鳥や冬鳥の渡来時期、ヤマガラやツバメの繁殖時期などを記録し続けて、気候変動の鳥たちへの影響を明らかにしています。

キビタキとオオルリどっちが早い？

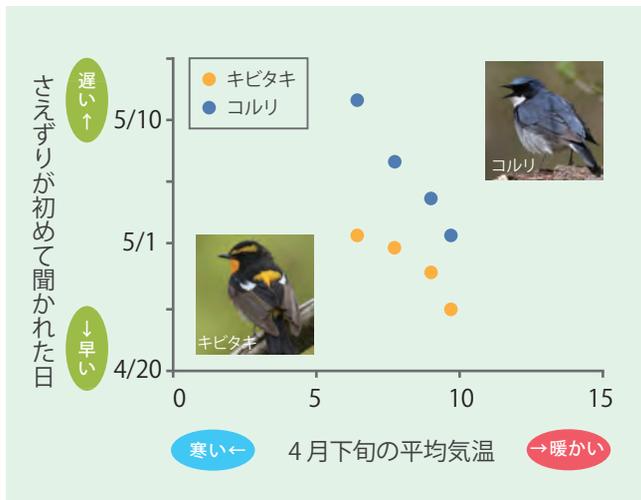
キビタキとオオルリは同じヒタキ科の鳥で、東南アジアで越冬し、春になると日本の林に渡ってくる夏鳥です。両種とも樹林にいる昆虫やその幼虫などを食べており、繁殖期の食性は比較的似ています。2013年と2014年の春に行なった初認調査では、オオルリの方がキビタキよりも少し早く初認されました。オオルリは沢のそばを好むので、春先にたくさん羽化する水生昆虫を狙ってより早く渡来するのかもしれない。

BRNews 11(6)

キビタキとオオルリの初認日の比較



夏鳥は気候変動に対応できない？



気候変動が鳥の繁殖時期に与える影響を明らかにするために、埼玉の秩父演習林で調査をしています。2010年からの結果を見ると、留鳥のヤマガラは冬からの積算気温が高い年は早く繁殖しました。積算気温は昆虫の発生時期に影響する温度で、ヤマガラは食物の発生時期にあわせて繁殖しているようです。それに対して夏鳥のキビタキとコルリは4月下旬の気温で渡来時期が決まっています。暖冬で虫が早く発生するようになっても、夏鳥はそれに対応できないことが心配されます。

陸生鳥類調査情報 5(2)

コルリとキビタキの渡来時期と4月下旬の気温との関係

その他

その他にもシギ・チドリ類、ガンカモ類、ミヤマガラス、ツグミやジョウビタキなどの飛来時期、ICレコーダーや

森林のライブ音配信を使ったさえずりの活発な時期のモニタリングも行ないました。

鳥との共存

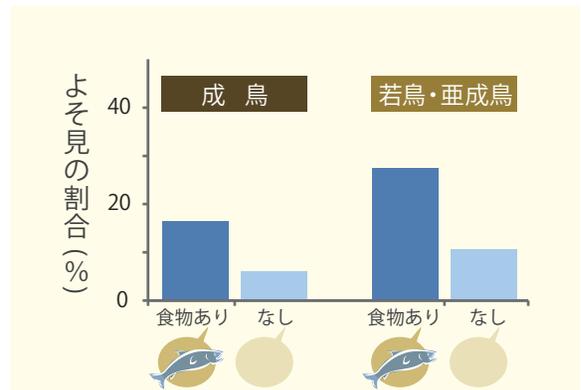
環境の改変により、絶滅したり急減した種が増えています。またその反面、一部の種は個体数が増加して、人間活動との軋轢が生じ、その解消が社会的に求められています。このような問題を軽減、解消し、人間と自然が共存できる社会を構築するためには、各生物種の分布や生態といった基礎的な情報を収集して現状を把握し、有効な対策を検討していく必要があります。

オジロワシ (Photo: 大塚之穂)

オジロワシは食物のある場所で衝突リスクが高まる？

北海道では毎年のようにオジロワシが風車にぶつかっています。そのため、環境省の風力発電のバードストライク防止策業務の中で、その危険を減らすための調査を行なっています。海岸に魚を置いて、オジロワシの食物がある状況をつくってみると、オジロワシは魚の方を見て前方を見ずに飛んだり、魚に引き寄せられてくるほかのワシやカラスを気にしながら飛ぶことが多くなりました。食物があると、「脇見運転」で風車への衝突事故の危険が高まりそうです。

BRNews 11(5)



↑ 食物の有無によるオジロワシの飛行中のよそ見割合の違い

海鳥は風車を避けて飛ぶ？

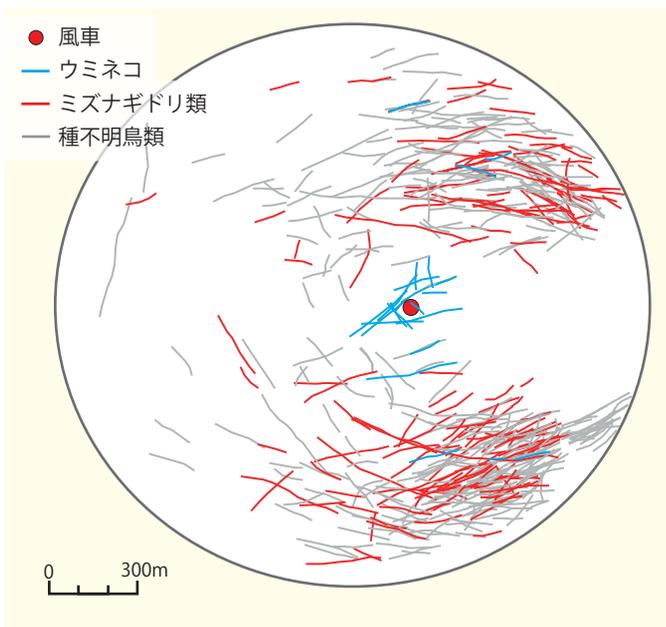
近年、洋上風力発電所の建設がはじまっていますが、それが鳥に与える影響は、ほとんどわかっていません。そこで、新エネルギー・産業技術総合開発機構と東京電力が行なっている銚子沖での洋上風力発電実証研究からの委託を受けて、

船舶レーダを使って風車に対する鳥の反応を調査しました。その結果、オオミズナギドリは風車を避けて飛んでいるのに対し、ウミネコは避けてはいるもののしばしば風車のそばを飛ぶこともあるなど、種による違いがあることがわかりました。

BRNews 11(11)

⬅ 風車の周囲の海鳥の飛行軌跡

▼ 銚子沖の洋上風車と調査用レーダ



川原に営巣するイカルチドリとコチドリ 巣の周りの砂礫、大きい？小さい？

露出した礫の地上に浅い皿状の巣を造って卵を産むイカルチドリとコチドリ。この二種はしばしば同所的に繁殖します。二種の巣の周辺の砂礫サイズに注目して営巣環境を比較してみたところ、コチドリは巣周辺1m²に占める砂や小石の割合がより高い場所を好み、イカルチドリでは様々な大きさの小石が混ざり合っている場所を好む傾向があることが分かりました。過去の砂利採集や河川改修等で、砂礫地の減少が危惧されている現在、これらのチドリ類の選好する礫サイズを考慮することも河川管理では重要だと思われます。



イカルチドリの卵と営巣環境 ▶



◀コチドリの卵と営巣環境

ツバメと共存する街づくり フン受けと引っ越し作戦



網を張って内側の壁にあった巣を使えなくしました。

▲入口を入ったところの天井に巣があり、ツバメのフンに困っていた公衆トイレ



▲人工巣とフン受け

ツバメのフンが迷惑がられて巣が壊されてしまうことがあります。そこで、ツバメが営巣する施設への段ボール製フン受けの配布と、営巣してもよい場所に人工巣を設置してツバメを誘導する実験を行ないました。このようなノウハウを広めて、ツバメと人が共存するための支援を進めていきます。本事業は、(株)シー・アイ・シーと皆様からの寄付金で実施しました。

BRNews 11(5)

広域連携によるカワウの保護管理

魚を食べるカワウは漁業者に嫌われます。軋轢を減らしていくためには、状況を正しく捉え、広域的な視点で管理する必要があります。今年に関東地方で被害の把握について研修会を開催したほか、中国四国地方でカワウの広域協議会の設立に協力しました。また、被害が拡大している最中の東北と九州において、カワウの管理に関する勉強会を開催するなど、カワウの広域管理の普及に努めました。

BRNews 11(6)



▲研修会でのグループワークの様子



カワウ (Photo: 湯浅芳彦)

みんなで楽しく鳥類学



バードリサーチは、全国の鳥の生態や生息状況に興味を持って「調べてみよう！」という人たちとのネットワークを作り、わくわくするような調査や研究をみんなで一緒にできる団体でいたいと考えています。全国的な調査体制を広げていくために、この1年間に行なった活動をご報告します。

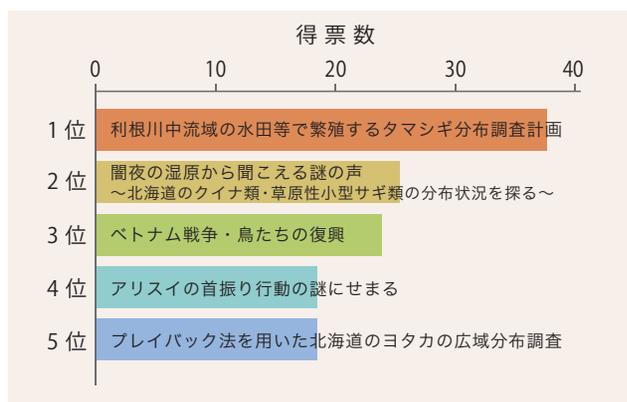
体験型調査「みにクル」と記念集会等の開催

鳥の調査を体験していただく「みにクル」を、今年も狭山公園、宇都宮中央公園のほか、富士山において実施しました。例年通りツバメのねぐら入り観察会も開催しました。昨年末にバードリサーチの設立10周年を記念して、東京都の立教大学において記念集会を開催し、121名の方にご参加いただきました。



▲富士山で野鳥の調査を楽しむ「みにクル」の参加者
◀10周年記念集会で基調講演いただいた上田恵介先生

バードリサーチ調査研究支援プロジェクト



みなさまから投票とご寄付を募り、それをもとに鳥類の調査や研究を行なう方に支援を行ないました。集まった寄付額は58万5千円、これらを得票数で割り振り8件の支援先に贈呈しました。また、昨年度の支援先の結果がまとまり、支援者の方々へ調査結果を報告しました。

BRNews 10(12),11(3),11(9)

今年度の支援先上位5件の得票結果

ニュースレターと研究誌の発行・書籍の出版

バードリサーチ創立当初から続く会員向けニュースレターも今年で11年目、その中でほぼ毎号掲載してきたコーナー「生態図鑑」の掲載種数は、119種になりました(2014年12月時点予定)。立教大学での国際鳥類学会議の開催に合わせ、このうち日本の固有種など48種の生態図鑑を英語化して公開しました。研究誌「Bird Research」には今年12本の論文が掲載されました(2014年11月16日時点)。書籍の出版として、加藤が執筆した「カワウのほん」が出版

されました。また、バードリサーチが執筆・監修した「野鳥手帖 2015」が山と溪谷社より出版されました。



調査へのご協力ありがとうございました。

ここまで紹介したもの以外にも、ここ数十年で都市へと生息域を拡大しているカワセミの食性調査を行ないました。写真をもとに食物を判定した結果、さまざまな魚種のほか、外来種であるアメリカザリガニをかなり捕食していることや、カエルやヤゴなど多様な生物を捕食していることが分かりました。選り好まない性格が、都市部の水域の水質改善にともなうすみやかな生息域拡大につながったのかもしれない。

BRNews 11(4)



カワセミ (Photo: 紅林重光)

また、サンショウクイの亜種の分布を調べる調査を行ない、2亜種の両方が分布域を拡大しつつある状況を捉えました。

これらの調査は、皆様に参加いただくことなしにはできなかつたものです。全調査をあわせ1321名の皆様にご協力いただきました。今年の活動へのご協力を感謝するとともに、今後ともよろしくお願ひいたします。

表紙写真：シジュウカラの雛 (Photo: 河村圭二)

STAFF



左上から時計回りに
守屋年史、笠原里恵、青山夕貴子、加藤ななえ、神山和夫、高木憲太郎、植田睦之



黒沢令子



平野敏明



三上かつら

特定非営利活動法人 バードリサーチ

〒183-0034 府中市住吉町 1-29-9
Tel / Fax : 042-401-8661
E-mail : br@bird-research.jp
<http://www.bird-research.jp>

デザイン：いきものパレット

*この活動報告はFSC認証紙を使用しています。